



ソーシャルスキル教育の観点からの保育内容（言葉）の内容分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2019-03-28 キーワード: 作成者: 本田, 真大 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006747

ソーシャルスキル教育の観点からの保育内容（言葉）の内容分析

本田 真大

北海道教育大学教育学部函館校

An Content Analysis of the “Contents of Childcare and Education of Language” from the Perspective of Social Skills Education

HONDA Masahiro

Department of Education, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

ABSTRACT

The aim of this study is to examine the “contents of childcare and education of language” from the perspective of social skills education. First, quantitative textual analysis was conducted. The results showed that the important words in the “contents of childcare and education of language” were “tell,” “sense,” “mind,” and “necessity.” Next, the correspondence between the “contents of childcare and education of language” and social skills education was examined. This examination revealed that the document’s content included several aspects pertaining to social skills, with the exception of words relating to “sense of language.” The perspectives of social skills education based on childcare and education systems were also discussed.

Key words : contents of childcare and education of language, social skills education, infant, quantitative text analysis

問題と目的

1. 幼児期のソーシャルスキルの重要性

ソーシャルスキルとは「対人関係を円滑に運ぶための知識とそれに裏打ちされた具体的な技術やコツの総称」であり（佐藤，2015），具体的な対人行動をとらえる概念である。幼児期のソーシャルスキルは小学校以降のソーシャルスキルと関連

し，将来にわたって個人の適応を予測することが示されている（レビューは，佐藤，2015）。そのため，幼児期に仲間から孤立せずに適切な対人関係を結べることは重要であると考えられる。したがって，幼児教育においてソーシャルスキルの観点から子ども理解をすることや，一人ひとりの子どものソーシャルスキルをアセスメントし，その発達を援助することが望まれる。

2. 幼児を対象としたソーシャルスキル教育

ソーシャルスキルを高めるための介入方法は、従来は攻撃行動が多い子どもや引っ込み思案な子どもを対象とし、仲間との適切な相互作用を促進することを目標として個別または小集団を対象にソーシャルスキルトレーニングとして実施されてきた(例えば、佐藤・佐藤・高山, 1993)。その後、学級集団のすべての子どもを対象としてソーシャルスキルを育成する方法が実践されるようになった。このような予防的・開発的な目的で集団対象に実施する方法はソーシャルスキル教育と呼ばれ(佐藤・相川, 2005; 相川・佐藤, 2006)、基本となる14のソーシャルスキルが明示されている(Table1)。そして、近年のソーシャルスキル教育では幼児集団を対象とした実践研究が行われている(岡村・金山・佐藤・佐藤, 2009; 清水, 2013; 佐藤, 2015)。

Table1 14の基本となるソーシャルスキルの分類
(相川・佐藤(2006)を基に作成)

分類	ソーシャルスキル
関係開始スキル	さわやかにあいさつする, 自己紹介, 上手な聴き方, 質問する
関係維持スキル	仲間の誘い方, 仲間の入り方, あたたかい言葉かけ, 気持ちを分かって働きかける
主張性スキル	やさしい頼み方, 上手な断り方, 自分を大切に
問題解決スキル	きちんと謝る, 怒りをコントロールする, トラブルの解決策を考える

3. 幼児教育におけるソーシャルスキル

幼児教育の中でソーシャルスキルについて言及しているものは清水(2015)など少なく、幼児の社会性や対人行動についてはソーシャルスキルの概念とは異なるとらえ方が散見される。例えば円滑な幼小接続を実現するためのアプローチ・カリキュラムにおいて社会性や対人行動に言及しているものは多い。八尾市・八尾市教育委員会(2014)では「つながる力」として「話す・伝えあう・言葉」, 「きく・理解する・くみ取る」, 「共感・折り

あう・協同性」という3つの要素を挙げている。さらに平成29年4月に告示された保育所保育指針(厚生労働省, 2017), 幼稚園教育要領(文部科学省, 2017), 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017)(以下, 3法令)の中で共通して記述されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中には「協同性」, 「道徳性・規範意識の芽生え」, 「言葉による伝え合い」, などがあり, ソーシャルスキルと関連が深いものが多くみられる。

4. 本研究の目的

本田(2018)によれば, 心理学の立場からは幼児期の発達におけるソーシャルスキルの重要性が実証され, ソーシャルスキル教育によってスキルの向上を図ることがめざされている一方で, 幼児教育の立場では「ソーシャルスキル」の概念とは異なるとらえ方で対人関係の重要性が指摘されており, 幼児教育におけるソーシャルスキル教育の位置づけが十分に検討されていない。本田(2018)は保育内容の5領域の中でソーシャルスキル教育と最も関連が深いと思われる保育内容(人間関係)をソーシャルスキル教育の観点から分析した。その結果, 保育内容(人間関係)の中では関係維持スキルと問題解決スキルが相対的に多く, 次いで主張性スキルが多く見られたこと, ソーシャルスキルそのものとは対応しない保育内容(人間関係)の記述内容は幼児の主体性や自律性, ソーシャルスキル教育による社会的に価値ある結果(Ogilvy, 1994), ソーシャルスキル教育の般化, という概念に分類できることが示された。

幼児教育において, 保育内容の5領域のねらいは幼児の自発的な活動としての遊びを通して総合的に達成されることが期待されている(文部科学省, 2017)。そのため, 保育内容(人間関係)以外の領域をソーシャルスキル教育の観点から分析することも必要であろう。そこで本研究では幼児教育の中に見られるソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育について検討することを目的とする。

方 法

1. 本研究で比較・検討に用いる資料

(1) ソーシャルスキル教育に関する資料

本研究ではソーシャルスキル教育において取り上げられることが多い14の基本となるソーシャルスキル（相川・佐藤，2006）を用いることとした（Table1）。この14の基本となるソーシャルスキルは幼稚園，小学校，中学校で共通する部分が多いと考えられており（佐藤，2015），現在の3法令では小学校への接続がこれまでよりも重視されていることを踏まえると，幼児期におけるソーシャルスキル教育の位置づけや在り方を検討する上で，小学校との接続が明確な14の基本となるソーシャルスキルを資料とすることが妥当であると判断された。

(2) 乳幼児の保育・教育に関する資料

ソーシャルスキル教育と比較する乳幼児の保育・教育の資料として3法令の保育内容（言葉）を用いることとした。その理由は以下の2つであった。第一に，わが国の乳幼児期を対象としたソーシャルスキル教育は主として3歳児，4歳児，5歳児の集団を対象に実施されており（清水，2013；佐藤，2015），また，平成29年4月に告示された3法令の中では3歳以上児に関する保育内容の記述が統一された。そのため，本田（2018）と同様にまずは3歳以上児の保育内容におけるソーシャルスキル教育の位置づけを検討する重要性が高いと考えられるためであった。第二に，ソーシャルスキル教育は非言語的側面も重視しているものの，主には言語的側面からソーシャルスキルを分類している。保育内容の中でソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育と最も関連するのは保育内容（人間関係）であると考えられるが（本田，2018），このようなソーシャルスキルの特徴から保育内容（言葉）との関連の検討は欠かせないと考えられるためであった。

(3) 分析方法

本田（2018）と同様の方法で，3法令の保育内容（言葉）の記述とソーシャルスキル及びソーシャ

ルスキル教育を比較・検討した。まず，保育内容（言葉）の情報を要約するために計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し，内容分析を行う方法であり，コンピュータの適切な利用が望ましいとされる（樋口，2014）。分析ソフトとしてKH Coderを用いることで恣意的な要約を避けるようにした。その結果を保育内容（言葉）の重要な情報の一つとしつつ，保育内容（言葉）のねらい，内容，内容の取扱いの各項目の記述と14の基本となるソーシャルスキルの対応を図り，ソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育の関連から保育内容（言葉）の記述内容を分類した。

結果と考察

1. 保育内容（言葉）の内容分析

(1) 保育内容（言葉）の全体像の把握

保育内容（言葉）の全体像を把握するために，ねらい，内容，内容の取扱いの記述を用いて計量テキスト分析を行った。ただし，「保育内容（言葉）」の見出しの下の括弧内の説明（「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し，相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て，言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」）と，「内容の取扱い」の見出しの次の一文（「上記の取扱いに当たっては，次の事項に留意する必要がある。」）は分析から除外した。

保育内容（言葉）は見出し（「保育内容（言葉）」，「ねらい」，「内容」，「内容の取扱い」）を含めて総抽出語数は609語（22段落，23文）であり，このデータを分析した。多く出現していた語を確認するために抽出語の出現回数を算出した（Table2）。最も多かったものから上位9語は，「言葉」（21回），「聞く」（7回），「楽しい」（6回），「自分」（6回），「生活」（6回），「伝える」（6回），「味わう」（6回），「幼児」（6回），「話」（5回），であった。

これらを代表とする抽出語同士の結びつき，すなわち語の出現パターンの似通った語（共起の程

Table2 保育内容（言葉）からの抽出語の出現回数

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
言葉	21	親しみ	3	友達	2	思い	1
聞く	7	親しむ	3	いろいろ	1	思う	1
楽しい	6	人	3	リズム	1	取扱い	1
自分	6	文字	3	挨拶	1	十分	1
生活	6	話す	3	意志	1	巡る	1
伝える	6	イメージ	2	応答	1	触れる	1
味わう	6	感覚	2	獲得	1	新しい	1
幼児	6	関心	2	楽しみ	1	身近	1
話	5	教師	2	感じる	1	尋ねる	1
絵本	4	経験	2	感情	1	接す	1
興味	4	考える	2	関わる	1	通う	1
内容	4	心	2	気持ち	1	動かす	1
日常	4	先生	2	気付く	1	美しい	1
表現	4	想像	2	響き	1	保育	1
物語	4	相手	2	結び付ける	1	遊び	1
分かる	4	他	2	見る	1	養う	1
豊か	4	体験	2	交わす	1	理解	1
喜び	3	注意	2	考え	1		
使う	3	必要	2	考慮	1		
次第に	3	味わせる	2	合う	1		

度が強い語)を探るために、集計単位を段落、語の最小出現数を2、描画数を60に設定した共起ネットワークを作成した(Figure1)。Figure1において、円が大きいほどその語の出現回数が多く、線が太いほど共起の程度が強く、円の色が黒に近いほど媒介中心性が高いことを表した。

媒介中心性に注目すると、「伝える」、「感覚」、「心」、「必要」が多くの語を媒介していることが明らかになった。「伝える」に関して、保育内容(言葉)の記述では(媒介中心性の高い語に下線を引いた)、ねらい(2)「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」、内容(10)「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。」、内容の取扱い(2)「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するよう

になっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」、内容の取扱い(5)「幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。」のように、伝えることに伴う肯定的な感情体験(楽しさ、喜び)と伝え合うことが重視されている。

「感覚」と「心」は双方ともに媒介中心性が相対的に高い語である上に共起していた。「感覚」と共起の程度が高い語は、媒体(「絵本」、「物語」、「豊か」)、想像力(「イメージ」、「想像」、「経験」)、相手(「友達」、「先生」、「心」)に分類し得る。「感覚」と「心」の語は内容(3)「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」、内容の取扱い(1)「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情

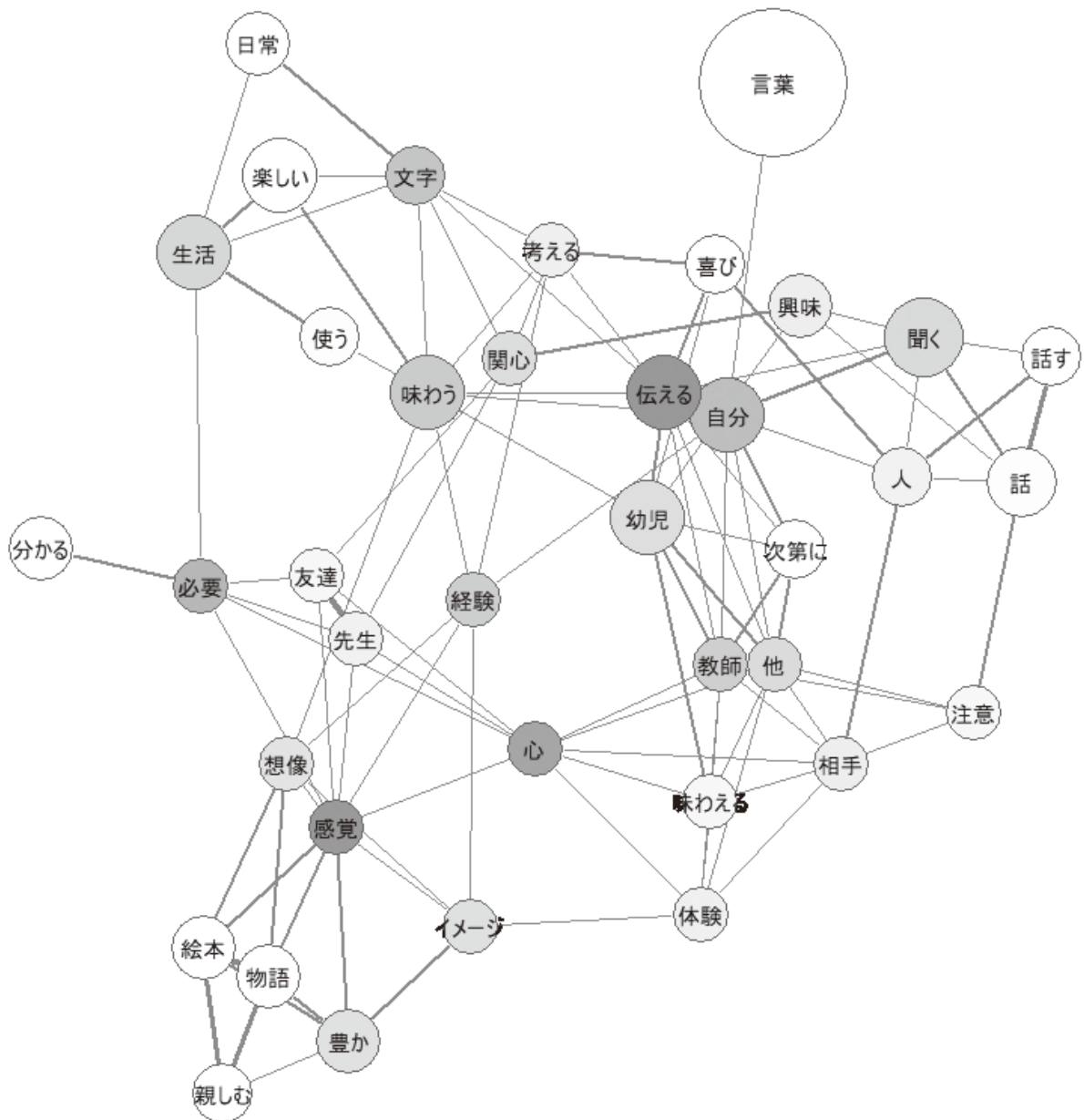


Figure1 保育内容（言葉）の共起ネットワーク

や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。内容の取扱い(3)「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」で用いられている。さらに、「言葉に対する感覚」は3法

令の改訂の中で保育内容（言葉）に新たに追加された文言である。そこで「感覚」の語に注目すると、相手（先生や友達）との関わりの中で心を動かされるような体験をし、想像力が沸き立つような媒体（絵本や物語など）との出会いや相互作用を通して養われた豊かな「言葉に対する感覚」を働かせながら相手（先生や友達）と心を通わせる旨が記述されている。

「必要」に関しては、ねらい(3)「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに（後略）」、内容(5)「生活の中で必要な言葉が分かり、使う。」

という記述に見られ、生活の中での必要感という体験が重視されていると考えられる。

(2) 保育内容（言葉）とソーシャルスキル教育の関連

媒介中心性の高い「伝える」、「感覚」、「心」、「必要」を中心に保育内容（言葉）を要約すると、「『言葉に対する感覚』を養い働かせるような相手と媒体という環境を構成し、幼児の生活の中での必要感に根差して言葉や文字を獲得し、獲得した言葉や文字を使って伝えること、伝え合うことで肯定的な感情体験を得る」と表現できよう。この内容を保育内容（言葉）の重要な側面ととらえてソーシャルスキル教育との関連を考察する。

コーチング法によるソーシャルスキル教育（ソーシャルスキルトレーニング）は、インストラクション（獲得や向上を促したい特定のソーシャルスキル（ターゲット・スキル）の説明）、モデリング（教師による良い例、悪い例などの見本提示）、リハーサル（設定的な状況での反復練習）、フィードバック（幼児の行動として現れたソーシャルスキルに対する他者からの肯定的な評価や改善点の指摘）、般化（練習したソーシャルスキルの定着）という流れで実施される（佐藤，2006）。

まず、インストラクションやそれに先立つソーシャルスキル教育の実施の決定、及びターゲット・スキルの選定において、ソーシャルスキル教育を実施することやターゲット・スキル自体に幼児の必要感があるかどうかをアセスメントすることが欠かせない。言い換えれば、子どもの実態（特に、幼児が実現したいこと、実現する上で難しさを感じていること、実現するために必要な環境や援助）を適切に把握した上で、子どもの実態に即した教師の願い（「このような幼児同士の関わりを経験してほしい」など）をもち、そのための教育方法の一つとして幼児教育にふさわしいソーシャルスキル教育の実施を検討する、という実施の意思決定過程が求められる。

モデリングにおいては、これまでの幼児集団を対象としたソーシャルスキル教育において紙芝居

やペープサートの寸劇を用いるなど工夫されている（例えば、佐藤，2015）。これらの実施方法は幼児の発達に即して理解しやすいことに加え、幼児が生活の中でうまくいかなかった対人経験や状況を想起し、ターゲット・スキルへの必要感を喚起するためにも有益であろう。

リハーサルとフィードバックは、ソーシャルスキル教育の対象となる幼児にとっての新たな、あるいはより質の高い対人行動（言葉の使い方や振る舞い方）を獲得する中核的な段階である。様々な状況の中で自分の思いを話すことや相手の思いを聞くことは従来のソーシャルスキル教育で取り上げられている（Table1）。そして、ソーシャルスキル教育の実施においては楽しさが重視されており（佐藤・相川，2005；相川・佐藤，2006；佐藤，2015）、伝えることで肯定的な感情体験ができるようにフィードバックがなされている。今後はリハーサルの段階で個々のソーシャルスキルに加えて、「伝え合う」ことを直接取り上げるソーシャルスキル教育の方法を検討していくことが必要であろう。「伝える」という行動は主張的スキルで扱う内容であり、その中で「伝え合う」機会を設定することができる。また、幼児教育においてはいざこざやけんかといった葛藤を保育者が丁寧に扱うことの重要性が指摘されており（無藤，2009）、問題解決スキルにおいては「伝え合う」ことを直接的に取り上げやすいと思われる。とはいえ、3，4，5歳の間で「伝え合う」姿が大きく異なると思われるため、どの程度の伝え合いをめざすのかを慎重に検討する必要がある。

これらに加えて、保育内容（言葉）では今回の改定により「言葉に対する感覚」が明記された（文部科学省，2017）。「言葉に対する感覚」を養い働かせるような環境（相手や媒体）を日常の生活において構成するのみでなく、ソーシャルスキル教育の環境においてもそれらの日常の環境とのつながりが意識できるとよいであろう。具体的には、担任教師が幼児の言葉の発達や育ちにおいて大切にしている価値観をソーシャルスキル教育の実施者と共有すること、幼児が幼稚園生活の中で触れ

たり親しんだりしている言葉や文字の環境をアセスメントすること、それらを取り入れながらソーシャルスキル教育の教材や進め方を準備すること、実施時にはリハーサルの段階を中心に幼児の言葉や文字の表現に内在する1人1人の「言葉に対する感覚」を読み取ること、などが挙げられる。本田（2018）はソーシャルスキル教育の評価として教師評定による心理尺度の得点の変化や幼児の行動観察を用いることは効果検証の点で重要である一方で、幼児教育にふさわしい評価方法を洗練させる必要性を指摘している。ソーシャルスキル教育という幼児集団に共通した設定的な状況の中で、個々の幼児の「言葉に対する感覚」を丁寧に読み取することは、幼児教育にふさわしいソーシャルスキル教育の評価方法の1つになるかもしれない。

2. 保育内容（言葉）の記述内容とソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育の関連

(1) 保育内容（言葉）とソーシャルスキルの対応

保育内容（言葉）の記述内容と14の基本となるソーシャルスキルの対応を検討した。14の基本となるソーシャルスキルは、相川・佐藤（2006）に基づいて4つの分類すなわち上位カテゴリ（関係開始スキル、関係維持スキル、主張性スキル、問題解決スキル）から対応を示した（Table3）。Table3の中で、行動として観察可能であると判断された記述箇所の下線を引き、さらにその箇所がソーシャルスキルの4つの分類と対応すると考えられた場合には最もよく対応すると判断した分類を記載した。

分類の仕方の例として、ねらい(1)「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。」に関して、「自分の気持ちを表現する」は主張性スキルに該当すると判断した。ねらい(2)「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」では、「聞く」は関係開始スキル、「話し」は関係維持スキルと対応すると考え、「伝え合う」は主張性スキルに加えてよく相手の話を聞くこと、つまり関係開始スキルが複合したものであると判断し、3つのスキ

ルが該当すると判断した。ねらい(3)「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」では、「分かるようになる」、「親しみ」、「豊かにし」、「心を通わせる」という文言からは観察可能な行動というよりも認知や態度と関連すると判断された。以上より、保育内容（言葉）の「ねらい」には、関係開始スキルに1つ、関係維持スキルに1つ、主張性スキルに2つ対応する箇所が確認された。

「内容」では、例えば内容(5)「生活の中で必要な言葉が分かり、使う。」は、幼稚園教育要領解説（文部科学省、2018）を見ると集団で遊びや生活を進めていく上で必要な言葉として、幼稚園生活で出会う「先生」、「組」、「当番の仕事」などの初めて聞く言葉や、順番や交替を意味する「貸して」、「いいよ」という遊びを楽しく展開する言葉が挙げられている。これらは葛藤状況などでの自分の思いを主張する以前の集団の遊びや生活を送るために必要な内容であるため、関係維持スキルに該当すると判断した。また、内容(10)「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。」は、幼稚園教育要領解説（文部科学省、2018）によれば所属や名前の文字に加え、ごっこ遊びの看板やメニューなどを例示し遊びの中での文字との出会いに言及しているため、関係維持スキルに最も該当すると判断した。以上より、「内容」には関係開始スキル4つ、関係維持スキル5つ、主張性スキル3つと対応する箇所が見られ、問題解決スキルと対応する箇所は確認されなかった。

「内容の取扱い」では、例えば内容の取扱い(1)「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。」について、「親しみをもって接し」と「幼児が教師や他の幼児と関わる」は具体的な行動としては曖昧であると判断した。さらに、「自分の

Table3 保育内容（言葉）とソーシャルスキルの対応

保育内容（言葉）	対応する ソーシャルスキル
ねらい(1) <u>自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。</u>	主張性スキル
ねらい(2) <u>人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</u>	関係開始スキル 関係維持スキル 主張性スキル
ねらい(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。	
内容(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、 <u>親しみをもって聞いたり、話したりする。</u>	関係開始スキル 関係維持スキル
内容(2) <u>したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。</u>	主張性スキル
内容(3) <u>したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。</u>	主張性スキル
内容(4) <u>人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。</u>	関係開始スキル 関係維持スキル
内容(5) <u>生活の中で必要な言葉が分かり、使う。</u>	関係維持スキル
内容(6) <u>親しみをもって日常の挨拶をする。</u>	関係開始スキル 関係維持スキル
内容(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。	
内容(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。	
内容(9) 絵本や物語などに親しみ、 <u>興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。</u>	関係開始スキル
内容(10) 日常生活の中で、 <u>文字などで伝える楽しさを味わう。</u>	関係維持スキル
内容の取扱い(1) <u>言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。</u>	関係開始スキル 主張性スキル
内容の取扱い(2) <u>幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。</u>	関係開始スキル 主張性スキル
内容の取扱い(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、 <u>楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。</u>	
内容の取扱い(4) 幼児が生活の中で、 <u>言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。</u>	関係維持スキル
内容の取扱い(5) 幼児が日常生活の中で、 <u>文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。</u>	主張性スキル

感情や意志などを伝え」は主張的スキル、「それに相手が応答し、その言葉を聞く」を関係開始スキルに分類した。このような対応づけの結果、「内容の取扱い」は関係開始スキル2つ、関係維持スキル1つ、主張性スキル2つと対応し、問題

解決スキルとの対応箇所は見られなかった。

合計すると、保育内容（言葉）の記述内容には関係開始スキル8つ、関係維持スキル7つ、主張性スキル7つが対応し、問題解決スキルと対応する箇所はないと判断された。

(2) ソーシャルスキルとの対応が見られなかった
保育内容（言葉）のねらいと内容

ソーシャルスキルとの対応が見られなかった4つの記述内容（ねらい(3), 内容(7), 内容(8), 内容の取扱い(3)は主に「言葉に対する感覚」と関わる部分であった。計量テキスト分析の結果から考察したように、従来のソーシャルスキル教育に含まれていない「言葉に対する感覚」を意識することが幼児教育にふさわしいソーシャルスキル教育の在り方の一つと言えよう。

総合考察

1. 本研究のまとめ

本研究の目的は幼児教育の中に見られるソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育について検討することであった。本研究の結果から明らかになったことは以下の3点である。第一に、計量テキスト分析によって保育内容（言葉）の重要な語は「伝える」、「感覚」、「心」、「必要」、であることが示された。第二に、ソーシャルスキル教育の観点から保育内容（言葉）をとらえると、「ねらい」、「内容」、「内容の取扱い」の多くの項目が基本となる14のソーシャルスキルの分類（関係開始スキル、関係維持スキル、主張性スキル）と対応するものの、問題解決スキルとの対応は見られないことが明らかになった。本田（2018）によれば、保育内容（人間関係）においては関係維持スキルと問題解決スキルが相対的に多く、次いで主張性スキルが多く見られている。このような違いは保育内容間の相違から生じるものであろう。

第三に、保育内容（人間関係）ではソーシャルスキルそのものとの関連が見られなくてもソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育に関わる概念との対応が見られたのに対し（本田，2018），本研究では保育内容（言葉）の中でソーシャルスキル教育と対応しないものとして「言葉に対する感覚」が挙げられた。この結果は、従来のソーシャルスキル教育を行うのみでは「言葉に対する感覚」の育ちの経験が十分保障されない可能性が

あることを意味する。もちろん、ソーシャルスキル教育以外の様々な機会を通して「言葉に対する感覚」を養うことも重要であるが、保育内容（言葉）との関連を重視したソーシャルスキル教育を行う上では「言葉に対する感覚」をいかに取り入れるかが課題となる。

本田（2018）は、心理学研究の主な関心としてソーシャルスキル教育の効果を実証する点は重要である一方で、幼児教育で重視される点（本研究では保育内容（言葉））を尊重することは、心理学の研究者と保育者が協働して子どもの育ちを支えることに貢献すると述べている。本研究から、そのような望ましい協働の実現に資する知見が得られた点で本研究には一定の意義があると言えよう。

2. 本研究の限界と今後の課題

第一に、本研究では保育内容（言葉）とソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育の対応を検討したが、保育内容の5領域のねらいは幼児の自発的な活動としての遊びを通して総合的に達成されることが期待されている（文部科学省，2017）。本田（2018）と本研究でソーシャルスキル教育と関連が深いと考えられる保育内容（人間関係）と保育内容（言葉）の領域から検討されたが、他の保育内容の領域においてソーシャルスキル及びソーシャルスキル教育の概念がどのように対応するか検討する必要がある。特に本研究において「言葉に対する感覚」が幼児教育にふさわしいソーシャルスキル教育の開発に寄与し得ることが明らかになったように、一見関連が弱いと思われる領域からソーシャルスキル教育をとらえることで幼児教育にふさわしいソーシャルスキル教育の開発に資する知見が得られると期待される。

第二に、本田（2018）と同様に、本研究で検討したソーシャルスキル教育はコーチング法に基づく方法のみであり、幼児のソーシャルスキルを育成する方法を広くとらえてそれぞれの方法の利点や限界を明示することも実践上有用であろう。

引用文献

- 相川充・佐藤正二 (2006). 実践! ソーシャルスキル教育
中学校 図書文化
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析—
内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- 本田真大 (2018). ソーシャルスキル教育の観点からの保
育内容 (人間関係) の内容分析 北海道教育大学紀要 (教
育科学編), 68(2), 65-74.
- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説
- 無藤隆 (2009). 幼児教育の原則 保育内容を徹底的に考
える ミネルヴァ書房
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017). 幼保連携型認
定こども園教育・保育要領
- Ogilvy, C. M. (1994). Social skills training with children
and adolescents — a review of the evidence on
effectiveness. *Educational Psychology*, 14, 73-83.
- 岡村寿代・金山元春・佐藤正二・佐藤容子 (2009). 幼児
の集団社会的スキル訓練—訓練前の特徴に焦点をあて
た効果の検討 行動療法研究, 35, 233-243.
- 佐藤正二 (2015). 実践! ソーシャルスキル教育 幼稚園・
保育園 図書文化
- 佐藤正二・相川充 (2005). 実践! ソーシャルスキル教育
小学校 図書文化
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993). 攻撃的な幼児の社
会的スキル訓練—コーチング法の適用による訓練効果
の維持 行動療法研究, 19, 98-109.
- 佐藤容子 (2006). 子どものSSTの実際 佐藤正二・佐藤
容子 編 学校におけるSST実践ガイド—子どもの対人ス
キル指導 混合出版, 41-51.
- 清水寿代 (2013). 幼児の集団ソーシャルスキルトレーニ
ング—長期効果の検討 幼児教育研究年報, 35, 37-44.
- 清水寿代 (2015). 社会的相互作用 児童育成協会・杉村
伸一郎・白川佳子・清水益治 基本保育シリーズ8 保育
の心理学 I 中央法規, 123-134.
- 八尾市・八尾市教育委員会 (2014). 接続期における教育・
保育実践の手引き
<[http://www.city.yao.osaka.jp/cmsfiles/contents/
0000025/25422/setuzokukitebiki.pdf](http://www.city.yao.osaka.jp/cmsfiles/contents/0000025/25422/setuzokukitebiki.pdf)> (2017年9月25日)

(函館校准教授)